

序

寺崎修先生は、平成二〇年三月末日をもって慶應義塾大学法学部を退職され、現在は本塾大学名誉教授とされている。本来であれば、昨年のご退職の際に『法学研究』記念号をご進呈すべきであつたが、諸般の事情で記念号の編集が遅れてしまった。ここに遅ればせながら、完成した本記念号を寺崎修先生に謹呈することで、先生が法学部教授として学部の研究と教育の発展に注がれた熱情と多大なるご貢献に対し、深く感謝の意を表したいと思う。

寺崎先生は、昭和四五年に慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻修士課程を修了され、昭和五二年に中部女子短期大学専任講師に就任、翌年には駒澤大学法学部に転じられ、以後平成九年まで、同学部の専任講師、助教授、教授を歴任された。先生が母校に教授として戻られたのは、平成九年四月のことである。以後一一年間にわたり、本学部において、日本政治思想史および日本政治運動史の分野で優れた研究と教育の業績を残された。

先生の学者としての人生を顧みるとき、三人の偉大な先達を思い出さずにはいられない。お一人は、寺崎先生の恩師・中村菊男先生である。近代日本政治史から現代日本政治論まで、縦横無尽の幅広い研究と発言を展開された大学者・中村先生のもとで、寺崎先生の日本政治への視界は大きく広く開かれた。昭和五三年に中村先生が急逝された後、寺崎先生をあたたく見守り、育ててくださったのは、律令制研究などで顕著な業績を残された、利光三津夫先生である。さらに、明治法制史研究の大家である手塚豊先生を忘れることはできない。中村先生亡

き後、寺崎先生は手塚先生の門を叩き、徹底した資料収集に基づく堅牢な実証的歴史研究の指導を受けられた。

以後、先生は、自由民権運動を研究の主軸に据えられ、手塚先生から相続された実証的研究手法によってその分析を進める着実な研究者生活を歩み、明治自由党の研究をはじめとする自由民権運動研究において、卓越した業績を残されてきた。徹底した一次資料の収集と冷静沈着な分析に基づき、果敢に通説に挑んでいくその姿勢は、われわれ後身の研究者に大きな勇気を与えてくれるものであった。先生が慶應義塾を去られるにあたり、それまでの自由党激化事件に関する研究をまとめられ、『自由民権運動の研究——急進的自由民権家の軌跡』と題して刊行されたことは、自由民権運動研究にとって貴重な成果となったことはいうまでもないが、慶應義塾の実証的歴史研究の結実として評価されるべきものであり、同時に、先生ご自身の「軌跡」をまとめられたものとして、まことに喜ばしい。

また先生は、長年にわたって法制史学会、日本政治学会、日本選挙学会、日本法政学会、社団法人福澤諭吉協会の理事を務められ、学会の発展と後身の育成に貢献された。現在でも、日本政治学会、日本法政学会、福澤諭吉協会において、理事としての先生の存在は、欠かすことのできない重みを持っている。

法学部にとって、平成九年という年に寺崎先生を日本政治思想史の担当者として迎えられたことは、僥倖であった。なぜなら、先生のご在職中に福澤諭吉没後百年を迎え、さらにご退職の年には慶應義塾が創立一五〇年を迎えたことで、福澤諭吉や慶應義塾の歴史を顧み、これを検証する各種事業が展開されたためである。寺崎先生は法学部を代表する形で、福澤研究センターの副所長に就任して福澤・塾史研究を牽引され、『福澤諭吉書簡集』、『福沢諭吉の手紙』、『福澤諭吉著作集』、そして『慶應義塾一五〇年史資料集』などの編集・編纂に当たってこられた。先生によって、福澤諭吉の思想が広く学界・社会に紹介され、また、その政治思想にあらたな光が当てられたことは、慶應義塾にとっても、また日本政治思想史研究にとっても、大きな収穫であった。また、先生は『慶

應義塾草創期の福沢門下生』、『慶應義塾出身衆議院議員列伝』などの論文集を編まれた。これらは、福澤門下生研究において、大きな足跡となった。このように義塾に多大な貢献をされた先生が退職されたことは残念というほかないが、先生の愛弟子の小川原正道准教授が寺崎先生の築かれた学問の王道を着実に継承している。

親しく優しい眼差しでそつと声をかけてこられる寺崎先生のお姿を三田で日常的に見られないことは実に寂しい。また、物事の本筋を外れない寺崎先生の発言をお聞きできないことも寂しい。しかし寺崎修先生は今も福澤論吉協会常務理事、そして『慶應義塾一五〇年史資料集』編纂委員として、日本の福澤研究および塾史研究を牽引されながら、武蔵野大学長として、同大学の発展に尽力しておられる。今後の先生のますますのご活躍とご健康を、心よりお祈り申し上げながら、ここに擲筆したい。

平成二二年二月

法学部長 国分良成